

A 国語問題

注意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべて黒鉛筆または黒芯のシャープペンシルで記入することになっています。黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は20ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は一〜三となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷ついたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

- 一 マークは、左記の記入例のように黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
- 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
- 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しきらずはきれいに取り除いてください。

マーク例

①
○ 1
○ 2
● 3
○ 4
○ 5

(3と解答する場合)

一 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答题紙に書くこと)

いぜんには、なにに向つて読むということもなしに、手あたり次第に読み、途中でたちとまって書物からひき出されるとりとめもない空想や感想にふける、という読みかたをする時間があった。貸本屋がどこにでもあった頃で、時代小説や推理小説を借りては読み、借りては読みして、とうとう近所の貸本屋の大衆小説の棚には目新しい本はなくなってしまったこともあった。その体験には本を読むということの、ほんとうに大切な部分があったような気がする。本を読むということは、ひとがいうほど生活のたしになることもなければ、社会を判断することのたしになるものでもない。また、有益なわけでも有害なものでもない。 a の世界があり、 b の

世界があり、いずれも体験であるにはちがいないが、どこまでも二重になった体験で、どこかで地続きになつているところなどないから、本を読んで実生活の役に立つことなどはないのである。また、世界を判断するのに役たつこともない。書物に記載された判断をそのまま受け入れると、この世界はさかさまになる。重たいのは書物の判断で、軽いのは現実の体験からくる判断だというように。これがすべて優れた書物であればあるほど多量にもっている毒である。そこで、書物の判断は、いつもパズルを解くような反訳をしてからでないと、現実には受け入れられないようにできている。書物がそういうものであるとすれば、読むことの中心には、いつも、なにに向つて読むのか、ということ(無)にしてしまうものがあつて然るべきだ、といったほうがいい。

あなたは、なにに向つて読むのか？

こういう本質的な問いにたいして、いまのわたしは、たぶん答える資格を欠いている。学生が試験に向つて読み、学者が研究に向つて読み、司法家が法律に向つてよみ、実務家が利潤に向つて読み、といったことと、あまり変りのない読み方しかしていないからである。そして、こういう読み方は、読書の中心にある大切なものを欠いた読み方にしかすぎない。図書館にゆくと、すべての書物は、誰かによつて手をつけられていることがわかる。けれど、たぶんほんとうに読まれたのではなく、なにかの役にたてようとして読まれる方がほとんどなのだ。余

裕もなく、はやく結論がみつけれないかどうかと焦りながら。そして、書き手もまた、読み手のせき込み、に
じようとして、なにかに尻をたたかれながら書物をつくりあげたという書物が、ほとんどであるかもしれない。

ある書物がよい書物であるか、そうでないかを判断するために、普通わたしたちがやっていることは誰でも類
似している。じぶんが比較的得意な項目、じぶんが体験などを総合してよく考えたこと、あるいは切実に思っ
ていること、などについて、その書物がどう書いているかを、拾って読んでみればよい。よい書物であれば、
きつとそういうことについて、よい記述がしてあるから、だいたいその個処で、書物の全体を占つてもそれほど
見当が外れることはない。

だが、じぶんの知識にも、体験にも、まったくかわりのない書物にゆきあたったときは、どう判断すればよ
いのだろうか。それは、たぶん、書物にふくまれている世界によつてきめられる。⁽³⁾優れた書物には、どんな分野
のものであつても小さな世界がある。その世界は書き手のもっている世界の縮尺のようなものである。この縮尺
には書き手が通りすぎてきた〈山〉や〈谷〉や、宿泊した〈土地〉や、出遇った〈人〉や、思い患った痕跡など
が、すべて豆粒のように小さくなって籠められている。どんな拡大鏡にかけても、この〈山〉や〈谷〉や〈土地〉
や〈人〉は、眼には視えないかも知れない。そう、じじつそれは視えない。視えない世界がふくまれているかど
うかを、どうやって知ることができるのだろうか？

もし、ひとつの書物を読んで、読み手を引きずり、また休ませ、立ちとまつて空想させ、また考え込ませ、よ
うするにここは文字のひと続きのようにみえても、じつは広場みたいなところだな、と感じさせるものがあつた
ら、それは小さな世界だと考えてよいのではないか。この小さな世界は、知識にも体験にも理念にもかかわりが
ない。書き手がいく度も反復して立ちとまり、また戻り、また歩きだし、そして思い患った場所なのだ。かれは、
そういう小さな世界をつくり出すために、長い年月を棒にふった。棒にふるだけの価値があるかどうかもわから
ずに、どうしようもなく棒にふってしまった。そこには書き手以外の人の影も、隣人もいなかった。また、どう
いう道もついていなかった。行きつ戻りつしたために、そこだけが踏み固められて広場のようになってしまった。

じつさいは広場というようなものではなく、ただの踏み溜り^{だま}でしかないほど小さな場所で、そこからさきに道がついているわけでもない。たぶん、書き手ひとりやつと腰を下ろせるくらいの小さな場所にしかすぎない。けれどそれは世界なのだ。そういう場所に行き当った読み手は、ひとつひとつの言葉、何行かの文章にわからないところがあっても、書き手をつかまえたことになるのだ。

わたしは、なぜ文章を書くようになったかを考えてみる。心のなかに奇怪な観念が横行してどうしようもなくもて余していた少年の晩期のころ、しゃべることがどうしても他者に通じないという感じに悩まされた。この思いは、極端になるばかりであった。とうとう、誰からも無口だといわれるほど、この感じは外にもあらわれるようになった。父親は、おまえこのごろ覇気がなくなったというようになった。過剰な観念をどう扱ってよいかわからず、しゃべることは、じぶんをあらわしえないということに思い患っていたので、覇気がなくなったのは当然であった。われながら青年になりかかるところの素直な言動がないことを認めざるをえなかった。いまおもえば、〈若さ〉というものは、まさしくそういうことなのだ。他者にすぐ判^{わか}るように外に出せる覇気など、どうせ、たしいした覇気ではない、と断言できるが、そのとき、そういいきるだけの自信はなかった。そうして、しゃべることへの不信から、書くことを覚えるようになった。それは同時に読むようになったことを意味している。

わたしの読書は、出発点でなに向って読んだのだろうか。たぶん、⁽⁴⁾自分自身を探しに出かけるといふモチーフで読みはじめたのである。じぶんの思い患っていることを代弁してくれていて、しかも、じぶんの同類のようなものを探しあてたいという願望でいっぱいであった。すると書物のなかに、あるときは登場人物として、あるときは書き手として、同類がたくさんいたのである。自分の周囲を見わたしても、同類はまったくいないようにおもわれたのに、書物のなかでは、たくさん同類がみつけれられた。そこで、書物を読むことに病みつきになった。深入りするにつれて、読書の毒は全身を侵しはじめた、といまでもおもっている。

ところで、そういう或^ある時期に、わたしはふと気がついた。じぶんの周囲には、あまりじぶんの同類はみつからないのに、書物のなかにはたくさん同類がみつけれられるというのはなぜだろうか。ひとつの答えは、書物の

書き手になった人間は、じぶんとおなじように周囲に同類はみつからず、また、しゃべることでは他者に通じないという思いになやまされた人たちではないのだろうか、ということである。もうひとつの答えは、じぶんの周囲にいる人たちもみな、じつはしゃべることでは他者と疎通しないという思いに悩まされているのではないか。ただ、外からはそう視えないだけではないのか、ということである。後者の答えに思いついたとき、わたしは、はっとした。わたしもまた、周囲の人たちからみると思いの通じない人間に視えているにちがいない。うかつにも、わたしは、この時期にはじめて、じぶんの姿をじぶんの外で視るとどう視えるか、を知った。わたしはわたしが判ったとおもった。もつとおおげさにいうと、人間が判ったような気がした。もちろん、前者の答えも幾分かの度合で真実であるにちがいない。しかし、後者の答えのほうがわたしは好きであった。⁽⁵⁾ 眼から鱗^{うろこ}が落ちるような体験であった。

(吉本隆明『背景の記憶』による)

問

(A) 空欄 および にはそれぞれどのような言葉を補ったらよいか。その組み合わせとして最も適切なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- | | | | | |
|---|---|----|---|----|
| 1 | a | 生活 | b | 書物 |
| 2 | a | 現実 | b | 利益 |
| 3 | a | 空想 | b | 読書 |
| 4 | a | 個人 | b | 大衆 |
| 5 | a | 自己 | b | 他者 |

(B) ——— 線部(1)について。優れた書物が「毒」をもつとは具体的にどういうことか。その説明として最も適切なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 優れた書物は社会的現実と地続きになっていないことが多いため、世界を判断するには役立たないということ。
 - 2 優れた書物に熱中するうちに、「なにに向って読むのか」という肝心かなめの問いが〈無〉に変わってしまうということ。
 - 3 優れた書物ほど、そこに記載された有益なものが、読み手において有害なものに変化してしまう危険が生じがちだということ。
 - 4 優れた書物はパズルを解くようにして現実を受け入れるために、世界の判断の仕方が実像とはあべこべになってしまうということ。
 - 5 優れた書物を読むうちに、書物の判断が現実の判断に優越するものであるかのように錯覚してしまうということ。
- (C) —— 線部(2)について。著者の考えの説明として、この傍線の前後の記述と合致するものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
- 1 実務家は経済的な利益をあげるために本を読むが、そのような余裕のない読書は役に立つようできて、結局は役に立たない。
 - 2 手当たり次第に本を手にとり、空想や感想にふける子ども時代の読み方は、やがて「読書の中心」ではなくなつてゆく。
 - 3 研究に向つて本を読む学者が、焦つて結論を見つけれないのは、読書における「大切なもの」が何かを忘れているからである。
 - 4 何かの役に立たねばならないという要求が、読み手と書き手の焦りと連動して、本をほんとうに読むことからひとを遠ざける。

5 学生や司法家のような本の読み方をやめても、はやく結論を見つけようとする余裕のない態度が改まるわけではない。

(D) ——線部(3)について。「小さな世界」の説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 書き手が旅先で出会った豆粒ほどの〈土地〉のような場所。
- 2 書き手があれこれと逡巡しながら思索を繰り返した場所。
- 3 書き手が他者とともに、長い年月をかけて形作った広場のような場所。
- 4 読み手が自身の体験をもとにすることによって何とか探りあてられる場所。
- 5 読み手の心を引きずり、考え込ませるほどに深遠な知識を秘めた場所。

(E) ——線部(4)について。著者はどういう動機で本を読みはじめたのか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 他者には理解されない過剰な観念を解消し、ありのままの自分自身を発見するため。
- 2 覇気を失ってしまつて無口になつてしまつた自分に、再び素直さを取り戻すため。
- 3 しゃべるといふ手段では言い表せない自らの苦悩を共有する仲間を見つけるため。
- 4 自分の周囲と違って、書物には自分自身を探しに出かける同類がたくさん登場することに気づいたため。
- 5 書物のなかの同類に思い患つていることを代弁させ、それまでの自己中心的な言動を改めてゆくため。

(F) ——線部(5)について。「眼から鱗が落ちるような体験」とは具体的にどういうことか。句読点とも三十字以上四十字以内で記せ。

(G) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 貸本屋で大量の大衆小説を借りて読んだ体験は、著者の読書論の核心になっている。

ロ 学生が試験に向つて読むことと、学者が研究に向つて読むことの違いはない。

- ハ 書物の内容に読み手の体験とそのまま重なるところが多ければ、それはよい書物だと判断できる。
- ニ 書き手が長い年月を棒にふるほど考え抜いた書物は、どんな読者にとつても何らかの価値をもつ。
- ホ 若い頃の著者にとつて、書く動機と読む動機のあいだには埋めがたい溝があった。

二 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答题紙に書くこと)

弱肉強食のビジネス界で、私がしきりに利他だの愛だの思いやりだのと口にしてるので、そんなおめでたいことばかりいって、あの美言の裏に何かあるのではないかという声を聞くこともあります。しかし、私は巧言を弄ろうして何か企図する気など毛頭ない。ただ自分の信ずるところを素直に人に伝え、また自分自身がそれを本気で実践していきたいと念じているだけです。

そもそも歴史を振り返っても、資本主義はキリスト教の社会、なかでも倫理的な教えの厳しいプロテスタント社会から生まれてきたものであることがわかります。

初期の資本主義の担い手は敬虔けいけんなプロテスタントだったわけで、マックス・ウェーバー(注1)によれば、彼らはキリストが教える隣人愛を貫くために厳しい倫理規範を守り、労働を尊びながら、産業活動で得た利益は社会の発展のために活かすということを、モットーとしていたといえます。

したがって、事業活動においてはだれから見ても正しい方法で利益を追求しなくてはならず、また、その最終目的はあくまで社会のために役立てることにありました。

つまり世のため人のためという利他の精神が——私益よりも公益を図る心が——初期の資本主義の倫理規範となっていたわけです。

自らに向けては、おのれを律する厳しい倫理を、外に向けては、利益という大義を自分たちの義務としていたわけです。その結果、資本主義経済は急速に発展を遂げることができたのです。

(1) 同様のことを、わが国でも江戸中期の思想家・石田梅岩(注2)が主張しています。当時は商業資本主義の勃興期にあたりますが、身分制度(注2)の下で商はもつとも下位に置かれ、商行為そのものが何か卑しいものとされるフウチョウ(1)がありました。

そのなかで梅岩は「商人の売利は士の禄(注3)に同じ」と述べ、商人が利を得ることは武士が禄をはむのと同じ正当

な行為であり、けっして恥ずべきことではないと、陰でさげすまれることの多かつた商人を励ましています。

「利を求むるに道あり」という言葉がありますが、利潤追求はけっして罪悪ではない。ただし、その方法は人の道に沿ったものでなくてはならない。どんなことをしても儲かればよいというのではなく、利を得るにも人間として正しい道を踏まなくてはならないと、商いにおける倫理観の大切さを説いています。

「まことの商人は、先も立ち、われも立つことを思うなり」——これも梅岩の言葉ですが、要するに、相手にも自分にも利のあるようにするのが商いの極意であり、すなわちそこに「自利利他」の精神が含まれていなくてはならないと述べているわけです。

利を求める心は事業や人間活動の原動力となるものです。ですから、だれしも儲けたいという「欲」はあってもいい。しかしその欲を利己の範囲にのみとどまらせてはなりません。人にもよかれという「大欲」をもって公益を図ること。その利他の精神がめぐりめぐって自分にも利をもたらし、またその利を大きく広げます。会社を経営するという行為をとってみても、すでにそれだけでおのずと世のため、人のためになる「利他行」を含んでいるものです。

いまでこそ終身雇用制は崩れつつありますが、社員を雇うということは、その社員の面倒をほぼイッシュウガ
イにわたってみなくてはならない義務が生じることを意味します。ですから、五人であれ十人であれ、社員を雇
用しているというだけで、すでに「人のため」になっているのです。

⁽³⁾これは個人でも同じです。独身のときには、自分一人の生活をよくすることを最優先してきた人が、結婚をし
て家庭を築き、自分だけではなく奥さんのために働き、子どもも育て守っていくようにする。このときその人の行
為には、やはり無意識のうちにも利他行が含まれているのです。

⁽⁴⁾ただし気をつけなくてはならないのは、利己と利他はいつも裏腹の関係にあることです。つまり小さな単位に
おける利他も、より大きな単位から見ると利己に転じてしまう。会社のため、家族のための行為には、たしかに
利他の心が含まれているが、「自分の会社さえ儲かればよい」「自分の家族さえよければよい」と思ったとたん、

それはエゴへとすり替わり、また、そのレベルにとどまってしまうのです。

会社のためという「利他の行い」も、会社のことばかりだと、社会からは会社のエゴと見える。家族のためという個人レベルの利他も、家族しか目に入っていないければ、別の視点からすると家族という単位のエゴと映るかもしれない——したがって、そうした低いレベルの利他にとどまらないためには、より広い視点から物事を見る目を養い、大きな単位で自分の行いを相対化して見ることが大切になってきます。

たとえば会社だけ儲かればいいと考えるのではなく、取引先にも利益を上げてもらいたい、さらには消費者や株主、地域の利益にも貢献すべく経営を行う。また、個人よりも家族、家族より地域、地域より社会、さらには国や世界、地球や宇宙へと、利他の心を可能ながぎり広げ、高めていこうとする。

すると、おのずとより広い視野をもつことができ、周囲のさまざまな事象について目配りができるようになってくる。そうになると、客観的な正しい判断ができるようになり、失敗も回避できるようになってくるのです。

(稲盛和夫『生き方』による)

(注) 1 マックス・ウェーバー——ドイツの社会学者・経済史家(一八六四～一九二〇)。

2 身分制度の下で商はもつとも下位に置かれ——近世日本の身分制度として理解されていたもの。

3 禄——給料。

問

(A) 線部イ・ロを漢字に改めよ。(ただし、楷書^{かいしよ}で記すこと)

(B) 線部(1)について。「同様」であることの説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 資本主義には隣人愛も必要だが、事業活動では競争相手に勝ち続けることが最も重要であるという考え。

2 厳格な倫理規範を守ることは、長期的には組織の利益を最大化するための最も効率的な手段であるという考え。

3 事業活動において利益の追求は正しい方法で行うべきであり、その背景には倫理観や利他の精神が存在することが大事であるという考え。

4 個々人が私的な利益を追求する自由な活動が、意図せずして社会全体の利益をもたらすという考え。

5 身分制度のもとで不当に低く見られていた商人が、自らの正当性を社会に示すための手段が商いであるという考え。

(C) ——線部(2)について。筆者の考えとして最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 社会からの信頼を勝ち取り、長期的な利益を安定させるための高度な経営戦略として、他者の利益を優先する姿勢を社会に示すことが重要である。

2 自社の利益を追求する心を利己的なものとしてまず否定し、事業を通じて社会に奉仕することにこそ企業の存在価値を見いだすことが重要である。

3 事業において利益を得ることは武士の俸禄と同様に正当だが、武士が私欲のために働かないように、企業も私的な利益への執着を捨てることが重要である。

4 事業活動において、自社の利益と取引相手や社会全体の利益とは本質的に対立するものではないと捉え、その調和と共存を追求することが重要である。

5 事業活動の目的はあくまで利益追求に限定し、そこで得た利益の一部を寄付などの形で社会貢献に使うことで、企業の社会的責任を果たすことが重要である。

(D) ——線部(3)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 事業を継続させるといふ利他的な目的のため、従業員の生活を保障するといふ利己的な手段を意識的に選ぶこと。

2 終身雇用制のように、一度契約を結んだ相手の面倒をショウガイにわたって見るべきだという倫理的な義務を負うこと。

3 会社や家族のために尽くすという利他的な行為を通じて、人は自己実現や生きがいを見いだしていくということ。

4 会社経営や家庭生活の根底には、常に自己犠牲を伴う無償の愛や貢献の精神が存在するべきだという理想を持つこと。

5 ある社会的役割や立場を担うこと自体に、本人は意図せずとも、利他的な側面がおのずと含まれるということ。

(E) ——線部(4)について。その説明として、合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ ある特定の集団に向けられた利他の心は、より大きな社会という視点から見ると、集団エゴとして利己的に映ることがある。

ロ どのような利他的な行動であっても、その動機を深く探れば、必ず自己の利益を求める心が見いだされるものである。

ハ 自らの行いを利他的だと自己評価するに留^{とど}まらず、より大きな視座から利己的と映らないか、常に問い続ける姿勢が重要である。

ニ 個人レベルの利他と社会レベルの利他は両立できないため、家族への愛情よりも公的な社会貢献のほうを重視すべきである。

ホ 利己的な動機から出発した行為であっても、その結果が他者の利益になるのであれば、完全な利他行為と見なすべきである。

(F) 次の各項について、本文の筆者の考えと合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答

えよ。

イ 厳しいビジネスの世界で利他を説くと、純粋な動機からではないと言われることがあるが、利他を説くのは言葉巧みに他者を操るためではなく、あくまで自らの信念を真摯に実行したいからである。

ロ 初期の資本主義を担ったプロテスタントは、隣人愛を実践するという目的意識から厳格な倫理規範を自らに課して労働に励み、事業の利益は社会全体の発展のために用いるべきだという信条を掲げていた。

ハ 石田梅岩が説いた「利を求むるに道あり」とは、利益を最大化するための最も効率的な手順や手法が存在するという意味であり、商人はその技術を磨くべきだという教えである。

ニ 事業の推進力として利益を求める欲求は肯定され得るものの、その欲は本質的に他者の不利益につながる危険なものであるため、公益の精神とは相容れないものとして、常に厳しく制御すべき対象だ。

ホ 事業で利他を実践する際には、まず株主や取引先といった直接的な利害関係者の利益を確保することが重要であり、消費者や地域社会といった、より広い範囲への貢献は、その後の余力で行うべき二次的な課題である。

三 左の文章は、『住吉物語』の一節で、下女の筑前が西の対に住む姫君宛ての恋文をたびたび持参していることを聞きつけた継母が、筑前に問いただすところから始まる。西の対の姫君は既に母を亡くして父の邸に引き取られていて、同じ邸内に継母とその娘の三の君が住んでいる。これを読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答紙に書くこと)

筑前を呼びて、「このほど、西の対へ文の通ふは、たれ人ぞ」とのたまへば、とかく言へども、あながちに問はせたまへば、申しけるは、「右大臣殿の御子に四位の少将殿の文を、たびたび参らせさぶらへども、さらに用ゐたまはず」と申せば、これを聞きたまひて、「さやうの君達は、人にいたはられんところおぼしめすらめ。母もなからん人よりも、三の君が大人しくなりたるに、耳寄りにこそはべれ。(注1)よきやうに計らひたまへ。みづからも世にあらん限りは、何につけてもとぼしきことはさぶらはじ」と、ねんごろに仰せらるれば、さすがにいなみがたくて、「たびたび申しさぶらへども、さらに御返事もさぶらはねば、少将殿はわらはをのみ責めさせたまふも、心憂くはべる。さりとして、申しかなへんこと、いとかたし。さらば、さも御計らひさぶらへかし」と言へば、喜びて、白き袷一襲、「三の君の」とて賜びぬれば、「さて、少将殿には、もとの御心ざしの御方とこそ申しはべらめ」と申せば、「よくのたまひたり。そのよしを」とて、支度しつ少将殿に参り、「なほ文をたまはりて、持ちて参りて見はべらん」と申せば、喜びたまひて、

A よとともに煙絶えせぬ富士の嶺の下の思ひやわが身なるらんと書きてたまへるを持ちて、「少将殿の文」とて、継母御前にたてまつれば、うち笑みて、「あはれ、うつくしく書きたまへるものかな」とて、「御返事疾く」と聞こえたまへば、姫君、たばかりとは知らずして、まことと思ひて、うちそばみておはしますさま、これも目やすくこそ見えはべれ。硯、料紙取り寄せて、「それぞれ」のたまへば、

B 富士の嶺の煙と聞けば頼まれずうはの空にや立ち昇るらん

と書いて、引き結びたるを、筑前取りて、少将殿に参らせさぶらひけり。
急ぎ見たまふに、手なども、いまだ幼びて書きたると思ふも、ことわりに思ひつつ、わりなくこそと喜びて、
さまざまにたばかることも知りたまはず通ひはべる。

(注) 1 耳寄りにこそはべれ——良い縁談話ですね。

2 三の君の——三の君からのお礼の品です。三の君はこの事情を知らされていないが、継母が三の君に代わってお礼の品を贈っている。

3 支度しつつ——筑前は打ち合わせを何度もして。

問

(A) ——線部(1)の現代語訳として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 少将殿は決してあきらめなさいません。
- 2 姫君は少しも恥ずかしがりません。
- 3 どなたも受け取ってくださいません。
- 4 少将殿は聞く耳をお持ちになりません。
- 5 姫君は全くお返事をくださいません。

(B) ——線部(2)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 女性から愛されたいと思っていらいっしやるのでしょう。
- 2 傷ついた心身を妻に癒いやすしてもらいたいとお考えなのでしょう。
- 3 妻の実母に結婚を許可してもらいたいと考えていらいっしやるのでしょう。
- 4 妻とその母に看病してもらいたいというご意向なのでしょう。

5 妻側の家から経済的な援助を受けたいとお思いなのでしょう。

(C) —— 線部(3)について。このように頼まれた後、筑前はどうか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 西の対の姫君が返事を書くように勧めた。

2 西の対の姫君と少将殿を結びつけるように励んだ。

3 少将殿と三の君を結婚させるように取り計らった。

4 少将殿と結婚するように三の君を説得した。

5 三の君と結婚するように少将殿を焚き付けた。

(D) —— 線部(4)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 貧乏になることは避けたいです。

2 この家が貧乏になることはないでしょう。

3 ますます財産は増えていくでしょう。

4 不自由なく暮らせるでしょう。

5 少将殿の財力に劣ることはないでしょう。

(E) —— 線部(ア)～(ウ)は、それぞれ誰を指しているか。最も適当なものを、次のうちから一つずつ選び、番号で答えよ。ただし、同じ番号を何度用いてもよい。

1 西の対の姫君 2 三の君 3 継母 4 筑前 5 少将殿

(F) —— 線部(5)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 少将殿と西の対の姫君を結びつけること

2 少将殿と三の君を結びつけること

3 少将殿にあきらめてもらうこと

4 少将殿に嘘をつき通すこと

5 筑前の希望を成就させること

(G) 線部(a)～(c)はそれぞれ誰に対する敬意を表しているか。最も適当なものを、次のうちから一つずつ選び、番号で答えよ。ただし、同じ番号を何度用いてもよい。

1 西の対の姫君 2 三の君 3 継母 4 筑前 5 少将殿

(H) Aの和歌の説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 「よとともに煙絶えせぬ富士の」が序詞となっている。

2 「富士の嶺の」は「下」を導き出す枕詞となっている。

3 「嶺」には「音」が掛けられている。

4 「思ひ」の「ひ」に「火」を掛けている。

5 「煙」「富士」「身」が縁語となっている。

(I) 線部(6)について。姫君はどう思ったのか。最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 少将殿が自分に恋をしているという噂は本当だったのだ。

2 少将殿が自分に恋い焦がれて恋文を贈ってきたのだ。

3 筑前が自分と少将殿を結びつけようとしている。

4 母が自分と少将殿を結びつけようとしている。

5 少将殿の和歌には嘘偽りのない真心が込められている。

(J) Bの和歌の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 絶えることのない富士山の煙に喩えられたあなたのお心だから、信じずにはいられません。

2 いくらお志が高くても、富士山の煙よりも高く立ち昇ることはないでしょう。

3 あなたのお心は浮ついたものなのでしょう。あてにできません。

4 あなたのお心が富士山の煙のように立ち昇ってしまおうと、皆に知られて困ります。

5 ずいぶん高望みをなさっているんですね。受け入れられません。

(K) ——— 線部(7)の現代語訳を三字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(L) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 筑前は継母から少し尋ねられただけで、いとも簡単に事情をしゃべった。

ロ 継母は、西の対の姫君と少将殿を結びつけようとして、あれこれ計画を練った。

ハ 継母は、自分の思うように筑前が動いてくれそうなので、嬉しくなつて物を与えた。

ニ 少将殿は、継母の計画を見破って、うまく立ち回って自分の志を貫いた。

ホ 少将殿は、継母の意向に従ったほうが得策と思ひ、知らないふりをして文通した。

【以下余白】